

「今、私の晴雨計は！」 (65)

「カメジローという男」

平山征夫

「米軍（アメリカ）が最も恐れた男 カメジロー不屈の生涯」という映画を見た。「大変面白かった」が、何よりも「痛快だった」。

戦後米軍占領下の沖縄で、敢然とその占領政策に抵抗し、本土復帰に命を懸けた男のドキュメンタリ映画だ。二年前「米軍が最も恐れた男」その名はカメジロー」が上映された。本作はその二作目。監督は佐古忠彦氏、TBSの筑紫哲也のニュース番組でキャスターを務めていた人だ。前作が評判を呼んだことから、TBSに残された映像と、二三〇冊に上る日記

を読み解いて二作目を作り上げたのだ。

カメジローこと瀬長亀次郎の名前は記憶にあつたが、ここまで筋を通し米軍に抵抗した男だったとは知らなかった。その人生は正に「不屈の闘い」。叩かれても叩かれても立ち上がり抵抗するカメジロー、何処か愛嬌のある顔ながら、眼光鋭く齒に衣を着せず鋭く迫る舌鋒は、人びとから喝采を浴びた。彼が演説会を開けばいつも5、10万人の大衆が集まつた。米軍の圧倒的支配下、土地を接収された沖縄の人々がじっと耐えている時に「土地を返せ」と一人叫んで闘ったのだ。この大衆の大きな支持こそ米軍が何より恐れたものだ。ざっとその履歴を

見てみよう。

一九〇七年沖縄県島尻郡豊見城村に誕生、医師を目指して第七高等学校（鹿児島）に入学するが、社会主義運動に加わったことで放校処分となる。労働運動の組織化などに務めるが、一九三二年丹那トンネル労働争議を指導して治安維持法違反で検挙され、懲役三年の刑で投獄される。出獄後、砲兵として中国へ出征。戦後、一九四六年うるま新報（現琉球新報）の社長に就任、在任中沖縄人民党の結成に参加したため、米軍の圧力で同社長を辞任、雑貨屋を営みながら組織活動を展開、人民党書記長となり、一九五〇年沖縄群島知事選挙に出馬するが落選。一九五二年第一回立法院議員総

選挙で最高得票当選、しかしこの選挙後開かれた琉球政府創立式典で一人宣誓を拒否したため、米国民政府は以後好ましからざる人物として対応。一九五四年十月米国民政府は瀬長を、沖縄から退去命令を受けた人民党員を匿った容疑で逮捕、懲役二年の判決刑で投獄。一人の証言だけで弁護士もなしで裁判にかけるなど、占領下と言えその審理には問題があつた。宮古島の収容所に送られながら、奇跡的に一九五六年四月人々の歓呼に迎えられて出獄、12月の那覇市長選に出馬、当選。しかし反米を公然と主張する人民党幹部のカメジローに米国民政府は、管理する琉球銀行に那覇市への補助金と融資打ち切り、預

金凍結措置を命じたため、市政運営は困難を極めた。これに対し多くの市民が自主納税で応援、97%に達した納税率で危機を脱したが、米国民政府は琉球民主党に七度に亘り不信任案を出させる。しかしすべて不発に終わる。

一九五七年高等弁務官ジェームス・E・ムーア陸軍中將は布令を改定(通称瀬長布令)し、一九五四年の投獄を理由にカメジローを追放し、被選挙権を剥奪した。市長在任は一年に満たなかったが、市政を巡る米国民政府との攻防は沖縄県民、那覇市民の大きな支持を受けた。その後、繰り返しパスポートの発給と瀬長布令の撤回を要求し続ける。10年後の一九六七年、大衆を敵に回すこと

は占領政策上むしろマイナスとして米国民政府は方針転換、漸く瀬長布令を廃止、被選挙権が復活した。翌六八年の第八回立法院議員選挙で議席を回復、一九七〇年の国政参加選挙では沖縄人民党公認で当選、一九七二年の第33回衆議院議員総選挙でも人民党公認で二期目の当選を果たす。この間、佐藤首相に「核抜き本土並み」沖縄返還を鋭く迫る。七三年人民党が日本共産党と合流したことから、以後は日本共産党公認で選挙戦を戦い、一九八六年の第38回衆議院議員選挙まで七期連続当選を果たす。一九九〇年政治活動から引退、二〇〇一年10月5日、肺炎で死去、享年94歳。不屈の精神で闘い続けた人生

だ。その演説は多くの人に勇気を与え、その人柄のせいか基地推進の経済界の人にも亀次郎ファンが多くいた。映画の中でも幾つか感動的場面があった。

・一九五〇年群馬知事選挙に出馬、首里中学校校庭の立会演説会でのカメジローの演説。

「この瀬長一人が叫んだならば、50m先まで聞こえます。ここに集まった人々が声を揃えて叫んだならば全那覇市民にまで聞こえます。沖縄70万県民が声を揃えて叫んだならば、太平洋の荒波を超えてワシントン政府を動かすことが出来ます」

・沢山の追っかけがいたカメジローの立会演説だが、特に次の演説は人々に勇気を与えた。

「一握りの砂も一滴の水も全部私たちのものだ。地球の裏側から来たアメリカはぬするれいびんど…泥棒だ。だから皆で団結して負けないようにしましょう」

「あきらめちゃならん。戦に負けたのは仕方がない。負けたんだから財産も焼かれた。しかし、これは間違いないんだ。戦争したのは誰か。東京の日本政府だ。我々はやっていない。私たちが奪うのは間違いだ」

—この演説を聴いた聴衆の反応を記憶していた人がいた。「いい勉強になりおったよ。勇気出さって。戦争に負けて親もみな殺されて皆泣いていたからね。前に進むようにって。この演説が米軍に射殺された天国のお父さんもお

母さんも喜ぶんだよって」

・一九七一年12月国会は、戦後初めて沖縄の国会議員が登壇した記念すべき議会だったが、カメジローはその前月「核抜き本土並み」を保障しないまま沖縄返還協定を衆院特別委員会で強行採決、本会議でも採決した自民党佐藤栄作総理に迫った。

「今国会冒頭の所信表明演説での沖縄問題に対する総理の結語を聴いていると、返還が目的ではなくて、基地の維持が目的である。ですからこの協定は、けっして沖縄県民が26年間血の叫びで要求した返還協定ではない。この沖縄の大地は、再び戦場となることを拒否する。基地となることを拒否する」

このカメジローの演説から更に48年が経った。しかし沖縄の基地の現状は何も変わっていない。海兵隊のグアム移転や基地の一部返還はあるが、世界一危険という普天間基地の辺野古沖海上へ移転させるのが唯一の基地対策だ。でも沖縄の人たちは望んでいない。沖縄の人々が望んでいるのは強制収容された自らの土地と基地のない沖縄そのものの返還だ。しかし政府も本土の多くの国民も「日米安保のためには、沖縄に基地負担をお願いするしかない」と考えているか、もしくは無関心だ。本当に沖縄に米軍基地がないと、海兵隊がいないと抑止力上問題なのか。日米安全保障と沖縄の米軍基地は本当に一体なの

か。それはどの国からの侵略に対するものなのか。サンフランシスコ条約による戦後復帰後、本土の米軍基地はどんどん返還されたが、沖縄だけは逆だった。以前見た別のドキュメンタリ映画では、ベトナム戦争の訓練で、ベトナムに扮した沖縄の農民を米兵が森の中で狩り出すシーンがありシヨックを受けた。この映画を見て、返還前の27年間はかなり酷い統制が行われていたことが想定された。もう一度沖縄について原点に戻って考えなくてはと思った。

今、カメジローはいない。でも近年の選挙のたびに出される沖縄の民意は、「基地ノー」だ。「カメジローなら今どんな演説をするだろうか・・・」と想定していたら、前回の映画に挿入された沖縄の女性コーラスグループ「ネーネーズ」の「教えてよ 亀次郎！」の歌詞が浮かんできた。

“うんじゅが情きさ 命どう
宝さ 我した想いゆ 届きてい
たぼり
それは昔、昔、その昔 えらい
えらい人がいて
島のため、人のため 尽くした
あなたなら どうする 海に向
こう 教えてよ亀次郎”

(令和元年11月26日)

